様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ５ 月　 ９ 日現在

機関番号：２１４０２
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2017～2019
課題番号：１７Ｋ１３４８６

研究課題名（和文）初級・中級日本語クラスでの「文化を訳す活動」の実践研究

研究課題名（英文）Practical research on "culture translating activities" in beginner and intermediate level Japanese language classrooms

研究代表者
行木　瑛子（Gyogi, Eiko）

国際教養大学・国際教養学部・助教

研究者番号：４０７８１２０８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,100,000円

研究成果の概要（和文）：近年、応用言語学で複言語・複文化能力の養成の必要性が提起されており、その中で二言語以上が関わる翻訳活動が再評価されつつある。ただ、特に学習者の母語が多様なクラスや、初級・中級レベルにおいては実践研究が欠如している。このため、本研究では、「文化を訳す活動」という新しい形の翻訳活動を日本の大学で日本語を学ぶ初級・中級学習者に実施し、その実践結果を主に主題分析した。分析の結果、特に(1) 解釈の多様性の認識、(2) ことばの選択の大切さ、(3) 自分の言語・他言語への意識・興味向上に関して翻訳が効果的であることがわかった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究は、複言語・複文化能力の向上のための手段として翻訳活動の可能性を探るものである。本研究では初級・中級学習者向けに翻訳実践を行い、その結果を国内・国外で広く周知した。これにより、海外の外国語教育や日本の日本語教育で翻訳活動を実施するための具体的な一例を提示でき、「言語教育における翻訳」の基礎研究の充実につながった。本研究の結果は、国内外で初級・中級クラスの日本語教育に携わる教師が、文化の教え方を考える際や、複言語・複文化能力の向上を目指した授業をデザインする際に利用価値のある知見になると思われる。

研究成果の概要（英文）：The recent so-called plurilingual turn in applied linguistics has called for increased attention to translation in language teaching. However, there is still few empirical studies on the role of translation, especially at beginner- and intermediate-level classrooms. This study fills this gap by examining learning outcomes derived from a series of translation sessions for beginner- and intermediate-level students of Japanese at a university in Japan. The results of a thematic analysis show that translation is especially effective in (1) recognizing multiple interpretations of the same text; (2) understanding the importance of choice of words; and (3) raising awareness of their own and other languages.

研究分野：日本語教育

キーワード：翻訳活動　日本語教育　文化　複言語・複文化能力　文化を訳す活動　初級　中級

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

日本語教育をはじめとする言語教育では、長い間翻訳が教室活動の 1 つとして使用されてきた。ただ、言語教育における翻訳は語彙や文法習得が中心の文法訳読法のような「文を訳す活動」のイメージが強く、特に英語圏では学習者のコミュニケーション能力の向上には資さないとの指摘を受け、敬遠されることも多い（Cook 2010）。しかし、応用言語学では近年、学習者はネイティブスピーカーになるために学習しているのではなく、様々な言語を駆使して生き、その文化間・言語間の仲介者となること、すなわち、複言語・複文化能力（Council of Europe 2001, 2018）の向上を目標にすべきではないかという考えも現れている。この流れの中で、必然的に二言語以上が関わる翻訳も再評価されるようになっている。

ただ、翻訳の重要性が国内外で唱えられているにもかかわらず、日本語クラスでの実践研究例は少ない。特に、世界中から留学生が集まり、学習者の母語が多様なクラスや、目標言語の知識が限られている初級・中級レベルのクラスでは、ほとんど実践例の報告がないようである。このような背景から、「文を訳す活動」ではなく、「文化を訳す活動」という新たな形での翻訳の実践研究を行い、翻訳を通してどのような学びが生まれるのかを調査することで、言語教育における翻訳に関する基礎研究を充実させることが不可欠であると考えた。

２．研究の目的

本研究では、初級・中級日本語学習者に対し、複言語・複文化能力を主眼においた、「文化を訳す活動」という新しい形の翻訳活動を実施し、その学習成果を明らかにすることを目的とする実践研究である。本研究ではまず、既に英国の大学で収集した初級・中級日本語クラスのデータを分析し、「文化を訳す活動」から生じる学びの詳細な考察を試みた。さらに、世界中から学生が集まり、学生の母語が多様である日本の大学において、類似の「文化を訳す活動」を実施し、母語が多様な日本の大学では「文化を訳す活動」はどう達成できるのか、翻訳活動を通してどのような学習成果が認められるのか（英語圏（ロンドン）では見られなかった新たな学びがあるか）を明らかにすることを目的とした。

３．研究の方法

上記の目的を達成するために、2017 年度に、ケーススタディーとして、国際教養大学で日本語を学ぶ初級学習者（19 名）、中級学習者（20 名）に「文化を訳す活動」を実施した。実践に先立ち、実践授業の内容を検討し、必要な倫理審査等も行った。授業は 1 回 80 分で、初級・中級学習者に各 5 回ずつ実施行った（参加は任意）。

本研究において「文化を訳す活動」とは、そのテクストがおかれた社会的文脈を意識しながら翻訳することである。授業では、クラスごとに、1 つの翻訳タスクを提示した。翻訳タスクは「友達に、著名人の SNS を翻訳するように頼まれた」など、できる限り現実に起こりうるタスクの設定を試みた。また、テクストも、異なる社会目的を持つジャンルのテクスト（広告、雑誌、SNS、新聞等）を選択した。クラスでは最初に各ジャンルのテクストの特徴を考察したあと、翻訳課題の原文を提示し、そのテクストの読み手はだれか、社会的目的は何か、どういう様式（紙媒体・オンライン等）かなどをディスカッションする時間を設けた。テクストを分析したあとに翻訳を試みたが、翻訳する際も、自分は何のために、誰に対して、どんな媒体で翻訳するのかをクラスで話し合い、目的や読み手、翻訳する媒体によって自分の翻訳も変わりうることを常に意識する形で翻訳を行った。クラスでは、一部を試訳し、ペアで比較したあと、クラス全体で話し合うという流れで行った。また、宿題として類似の課題を課し、学生は学習日記とともに、翻訳とコメンタリー（自分の翻訳の説明）を提出した。

翻訳活動による学習成果を多角的に観察するため、(a) 学習者の授業中のディスカッションの録音データ（約 26 時間分）、(b) 各授業後に学習者が提出した翻訳課題・コメンタリー、学習日記、(c) 実践授業の最初と最後に行った翻訳タスク・日本語作文タスクとその録音データ（約 60 時間分）、(d) 実践授業の最初と最後に行ったインタビュー（約 20 時間分）など、幅広いデータを収集した。

2017 年度後半から 2019 年度にかけては、主にデータ整理・分析と、分析結果の発表・出版を行った。分析では、特に重要と思われるデータを抽出し、録音データの書き起こし・翻訳作業を行った上、質的データ分析ソフトウェア NVivo を使用して、学習者のディスカッションや学習日記、翻訳課題を主に主題分析し、内容ごとにカテゴリー分けした。なお、主題分析とは，データに共通して現れる主題を特定し分析するものである（Braun ＆ Clarke 2006）。また、学生の理解が翻訳に反映されているのかを調べるため、学生が宿題として提出した翻訳の一部については、匿名化して第三者による評価も行った。なお、これに並行して、既に収録済の英国の大学のデータの論文執筆も進めた。

さらに、2019 年度には国際教養大学の通常クラスで、研究成果を取り入れた授業を計画し、実施した。また、クラスで使用するための教材も作成した。

４．研究成果

(1)　主な成果

本研究の結果として、「文化を訳す活動」という翻訳活動が、初級・中級学習者という、目標言語の知識が限られた学生であっても、また、学習者の母語が多様なクラスでも導入できること

を証明できた。特に、翻訳活動からの学びとして、複言語・複文化能力に関する以下の 3 点が認められた。

① 解釈の多様性に対する認識

言語教育では、著者の意図にあたかも一つのように提示されることが多く、それについては批判もある（Kramsch and Huffmaster 2008）。「文化を訳す活動」では、ことばの選択（ひらがな・カタカナ・漢字のどの表記を使うか、敬語の使用の有無など）がいかに読み手の受ける印象や書き手・読み手の関係を左右するのかなどについて分析し、同じ文でも多様な解釈が存在することを考えるきっかけになったようである。

例えば、英国の大学の初級学習者向けの第 1 回目のクラスでは SNS の英訳を試みた。「酔って。参加。結果。最悪。帰宅。。。」（Ariyoshi [ariyoshihiroiki] 2013 年 10 月 12 日）という芸能人の有吉弘行の Twitter の一文を、彼のファンのために英訳するというものだったが、たった一文であっても、「Got drunk. I joined in. Result? The worst. Going home now…」、「Mission – get drunk. Friend Acquired. Mission – Success. State – Very ill. Time to go pass out」、「Got drunk. Took part. Fell apart. Went home…」と、学生によって全く違う翻訳が生まれ、驚きを覚えた学生が多数いた（Gyogi 2019a, 2019d）。特に、こういった意識を育むためには、クラスディスカッションが大きな役割を果たしていたようである。英国の大学で収集した学習日記を主題分析した結果、クラスメートと翻訳を共有・比較することによって、同じ文であっても、多様な解釈が存在することを意識できたようであった（Gyogi 2019d）。

さらに、今回の実践研究により、学生の母語の違う日本の大学であっても、リンガフランカとしての英語を活用することにより、類似の学びが見られた（Gyogi 2019b, 行木・岩﨑 2019）。この結果、母語を共有していなくても、リンガフランカとしての英語で意思疎通ができる能力があれば、初級・中級レベルからこのような活動が可能ということも明らかになった。
また、母語や他の言語を積極的に活用することにより、目標言語の知識が限られている初級・中級学習者でもこのような「文化を訳す活動」が十分可能であることが明らかになった。さらに、「翻訳」という活動を用いることで、教科の授業ではなく、言語教育の枠内で、言語を用いながらこのような解釈の差異について話し合う活動が実施できた。リンガフランカとしての英語も共有していないクラス（すなわち、目標言語である日本語以外に意思疎通できる言語がないクラス）の場合に、初級・中級レベルでこのような活動ができるかについては実践研究が望まれるところである。ただ、本研究を通して、「文化を訳す活動」の実施に、全員が英語の母語話者相当の能力が必要なわけではないということがわかった。さらに、Lee and Gyogi（2018）では、韓国の英語クラスで行った翻訳活動との比較を試みたが、言語や環境が違っても、翻訳を通して cultural-specific lexis（言語に特有の語彙）について類似の学びが観察されたことから、このような「文化を訳す活動」が様々なクラスで応用できるという示唆が得られた。

② ことばの選択の重要さ

次に、「文化を訳す活動」では翻訳プロセスを通して、テクストを分析するだけでなく、自らがどういったことばを使って、どんな効果を産み出したいかという産出面についても考えることができた。上記の Twitter の例でもあるように、一つ一つのことばの選択によって、読み手の印象が異なることから、ことばの選択の大切さについても考えることができたようである。

このことばの選択という点では、翻訳授業の前後で大きな変化が見られた。学習者は 5 回の翻訳授業の前後に、E メールの翻訳タスクを行った。英国の大学の初級学習者のデータを分析したところ、クラス前の E メールの翻訳タスクでは、語彙や文型をどう翻訳するかに着目している学生が大半であったが（例えば、この単語の意味がわからない、文型が正しいかわからない等）、クラス後の類似の E メールの翻訳タスクでは、この表現を使うと読み手が嫌な気持ちになるかもしれないなど、読み手への配慮が数多くみられ、適宜、原文にない文を追加するなど、言語間を仲介することを重点においた翻訳が見られた（Gyogi 2018）。

これについても、学習者の母語が多様なクラスでも十分に可能であることが明らかになった。日本の大学ではエマ・ワトソンのインタビュー記事を翻訳したが、その際に、女ことばを使うか使わないかで読み手への印象が変わることから、どのことばを選ぶべきかの省察が多数見られた（Gyogi 2019b）。また、日本の大学の別のクラスでは、オノマトペの入った広告を翻訳したが、学習者は、子音「s」を重ねたり、ポジティブな印象の形容詞を使用するなど、広告におけるオノマトペの効果を考えた上で、その効果をもたらす表現に訳していた（行木・岩﨑 2019）。

③ 自分の言語・他言語への意識・興味向上

最後に、今回の日本の大学での実践研究では、英語・日本語の翻訳にとどまらず、クラスでは様々な言語を比較するようなディスカッションを含めた。また、日本語を翻訳する場合は、英語以外の言語への翻訳も可能としたが、これについては英語が母語でない学生全員から肯定的なフィードバックが得られた（Gyogi 2019c）。さらに、自分の言語と日本語の違いをクラスで共有することにより、母語・日本語間だけでなく、様々な言語間の違いについての意識向上にもつながった。例えば、オノマトペの入った広告の翻訳クラスでは、自分の言語・文化資源を活用することで、広告における母語（または熟知する英語）と日本語のオノマトペの使用の違いを浮き彫りにでき、言語・文化によってどのような表現が有効かも意識できたようであった（行木・岩﨑

2019)。今まで全く知らなかった言語と比較することで、翻訳というプロセスそのものについてさらに深く知ることができたという学生もおり、英国の大学のデータでは見られなかった学びも見られた（Gyogi 2019c)。

(2)　研究の国内外における位置づけ

本研究は､複言語･複文化能力の向上のための手段として翻訳活動の可能性を探るものである。ヨーロッパ言語共通参照枠（CEFR）や国際交流基金の JF 日本語教育スタンダードにも複言語・複文化能力の養成の必要性が唱えられているが、実践の場では特に初級・中級クラスでは目標言語のスキル向上に重点が置かれ、これらの理論が実践されていないという報告もある（Kern 2002)。本研究を通して、こういった理論を、海外の外国語教育のみならず、日本の日本語教育で実現させていくための具体的な一例を提示することができたと考える。本研究の結果は、特に日本において初級・中級クラスの日本語教育に携わる教師が、文化の教え方を考える際や、複言語・複文化能力の向上を目指した授業をデザインする際に利用価値のある知見になると思われる。

(3) 今後の展望

今回、日本の日本語教育の初級・中級クラスで翻訳の実践研究を行い、成果の発表・出版を通して、この分野の基礎研究の充実に貢献することができた。今後の展望としては次の 3 点があげられる。1 点目に、全体の数としてはまだ実践研究が少ないため、今後も実践研究の継続が必要であると考える。特に、言語教育における翻訳は上級クラスで実践されることが多いため、上級クラスでの実践研究も行いたいと考えている。2 点目に、学会発表などを通して意見交換する中で「興味はあるがどうクラスに取り入れるかわからない」といった声も聞かれた。このことから、日本語教育における翻訳実践の現状を把握し、実践を困難にさせている要因を探ることも必要となるだろう。最後に、今回の成果をもとに、国際教養大学の通常クラスで今回の成果をもとにした授業を導入したが、日本語教師向けの翻訳の指導用教材を開発し、幅広く教育現場に還元することも必要と考える。

＜引用文献＞

Braun, V., & Clarke, V. (2006). Using thematic analysis in psychology. *Qualitative Research in Psychology, 3*(2), 77-101.

Cook, G. (2010). *Translation in language teaching: An argument for reassessment*. Oxford: Oxford University Press

Council of Europe.(2001). *Common European Framework of Reference for Languages: Learning, teaching, assessment*. Council of Europe.

Council of Europe. （2018） *Common European framework of reference for languages: Learning, teaching, assessment: Companion volume with new descriptors*. Council of Europe.

Gyogi, E. (2018). Stepping into others' shoes: Elementary students as mediators between the reader and the writer. *Translation and Translanguaging in Multilingual Contexts 4*(2), 223–247.

Gyogi, E. (2019a). Translating 'Japanese culture': A discourse approach to teaching culture. *Language and Intercultural Communication 19*(2), 152-166.

Gyogi, E. (2019b). Critical literacy in beginner-level Japanese-language classrooms. In P. Clements, A. Krause, & P. Bennett (Eds.), *Diversity and inclusion*. Tokyo: JALT, 229-234.

Gyogi, E. (2019c). Possibilities and difficulties in teaching translation in culturally and linguistically diverse classrooms. Paper presented at the PluriTAV International Conference Multilingualism, Translation and Language Teaching at Universitat de València, Valencia, Spain.

Gyogi, E. (2019d). Class discussion as a site for fostering symbolic competence in translation classrooms. *Language, Culture, and Curriculum*.

Lee, V. & Gyogi, E. (2018). Cultural-specific lexis for intercultural communication: Case studies from two different classrooms. *Journal of Language, Identity & Education 17*(3), 137-151.

Kern, R. (2002). Reconciling the language-literature split through literacy. *ADFL Bulletin 33*(3), 20-24

Kramsch, C., & Huffmaster, M. (2008). The political promise of translation. *Fremdsprachen Lehren Und Lernen 37*, 283–297

行木瑛子・岩﨑典子 (2019)「ジャンル準拠の初級オノマトペ指導：広告(CM)の翻訳活動を通して」『日本語教育』174 号, 71-85.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計6件（うち査読付論文　6件／うち国際共著　1件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 行木瑛子、岩﨑典子	４．巻 174
２．論文標題 ジャンル準拠の初級オノマトペ指導 ： 広告(CM)の翻訳活動を通して	５．発行年 2019年
３．雑誌名 日本語教育	６．最初と最後の頁 71-85
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Eiko Gyogi	４．巻 0
２．論文標題 Class discussion as a site for fostering symbolic competence in translation classrooms	５．発行年 2019年
３．雑誌名 Language, Culture, and Curriculum	６．最初と最後の頁 1-15
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1080/07908318.2019.1625361	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Eiko Gyogi	４．巻 0
２．論文標題 Critical literacy in beginner-level Japanese-language classrooms	５．発行年 2019年
３．雑誌名 JALT2018: Diversity and Inclusion	６．最初と最後の頁 229-234
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 Eiko Gyogi	４．巻 19
２．論文標題 Translating ‘Japanese culture’: A discourse approach to teaching culture.	５．発行年 2019年
３．雑誌名 Language and Intercultural Communication	６．最初と最後の頁 152-166
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1080/14708477.2018.1513525	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Vivian Lee, Eiko Gyogi	4．巻 17(3)
2．論文標題 Cultural-specific lexis for intercultural communication: Case studies from two different classrooms	5．発行年 2018年
3．雑誌名 Journal of Language, Identity & Education	6．最初と最後の頁 137-151
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1080/15348458.2017.1418357	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1．著者名 Eiko Gyogi	4．巻 4
2．論文標題 Stepping into others’ shoes: Elementary students as mediators between the reader and the writer	5．発行年 2018年
3．雑誌名 Translation and Translanguaging in Multilingual Contexts	6．最初と最後の頁 223-247
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1075/ttmc.00011.gyo	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計11件（うち招待講演　1件／うち国際学会　9件）

1．発表者名 Eiko Gyogi
2．発表標題 Translation as joy and struggles in beginner- and intermediate-language classrooms: Potential for student agency
3．学会等名 4th International Conference on Language, Linguistics, Literature and Translation: Exploring Cultural Intersections（国際学会）
4．発表年 2020年

1．発表者名 Eiko Gyogi
2．発表標題 Translating Harry Potter for beginner-level students: Towards multiliteracies
3．学会等名 Applied Linguistics Association of Australia and the Applied Linguistic Association of New Zealand 2019（国際学会）
4．発表年 2019年

１．発表者名 Eiko Gyogi
２．発表標題 Possibilities and difficulties in teaching translation in culturally and linguistically diverse classrooms
３．学会等名 PluriTAV International Conference Multilingualism, Translation and Language Teaching（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 阿部祐子、行木瑛子
２．発表標題 地域と連携したインバウンド誘致授業の試み―横手ホテル多言語化プロジェクト―
３．学会等名 第40回異文化間教育学会
４．発表年 2019年

１．発表者名 Eiko Gyogi, Vivian Lee
２．発表標題 Multimodality in translation: A look into EFL and JFL classrooms
３．学会等名 International Association for Translation and Intercultural Studies (IATIS) International Conference（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 行木瑛子、岩﨑典子
２．発表標題 日本語オノマトペへの意識と感覚を培う初級クラスの翻訳活動：広告のオノマトペを使って
３．学会等名 ヴェネツィア2018年日本語教育国際研究大会（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Eiko Gyogi
２．発表標題 Awareness of “others” around you: Another potential of translation activities in the language classroom
３．学会等名 2018 International Conference on Bilingual Learning and Teaching（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Eiko Gyogi
２．発表標題 Critical literacy in beginner-level JSL classrooms
３．学会等名 JALT2018: 44th Annual International Conference on Language Teaching and Learning & Educational Materials Exhibition（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 行木瑛子
２．発表標題 選択体系機能言語学(SFL)の日本語教育への応用の試み：日本語使用者として主体的に言葉を使うために
３．学会等名 第19回SFL研究会（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Eiko Gyogi
２．発表標題 Designing SFL-based translation activities for use in bi/multilingual pedagogy: Case study from a Japanese language classroom
３．学会等名 Shanghai Jiao Tong University（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 Eiko Gyogi
２．発表標題 Students’ voices on the use of own languages in a multilingual classroom: A case study of an intermediate-level translation classroom.
３．学会等名 Canadian Centre for Studies and Research on Bilingualism and Language Planning (CCERBAL) Conference（国際学会）
４．発表年 2018年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	岩﨑　典子 (Iwasaki Noriko) (30836028)	南山大学・人文学部・日本文化学科・教授 (33917)	
研究協力者	リー　ヴィヴィアン (Lee Vivian)	韓国外国語大学校・英語通訳翻訳科（EICC）・准教授	